

Title	ラスキンの労働者教育 -一八六〇年-委員会に於ける彼の陳述-
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.6 (1924. 6) ,p.889(125)- 908(144)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240601-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

者に株を取得せしめねばならぬ 而して倫敦瓦斯會社やスチール・トラストの例の如き禁讓渡株では、そのことの不可能であるとは明かである。それは幾何もなくしてそれ等すべての株式は分配せられ、新入組合員は何等の権利を有せず、従つて彼等は遂に *associés* たることが出来ぬであらう。如斯して一方に於いては古參の組合員に與へたる株式は、それ等の古參組合員の退會死亡に因りその相續者に分散して、フアミリストアイルはその内に勞働する者に非らざる他の人々の所有に歸し、他の資本的企業に比して何等異色なきものとなつて了ふ。勞資の間には嚴重なる境界を要する。すなはちすべての勞働者は *actionnaire* たり得べきも他の何者も、これたり能はぬ、かくて求め得られたる方策は、株式の帳回 (*le roulement des actions*) 之れである 組合員が退會又は死亡に因つてその員から退く場

合、組合はその持株を買ひ戻す。而してこの株は、その參加が價する日に於いて、これを望むものに譲る。既に持株を賣つた組合員も、その賣却當時の値段でこれを再び買ひ戻し再度フアミリストアイルの一員たるの権利を失ふものではない。(尙ほ)の項 Comte R. de Briey, *Essai sur la sociation du capital et travail par l'actionariat ouvrier* suivi d'une note de M. Aristide Braind et de *statuts-types de société a participation ouvrière dressés avec la collaboration de M. Jules Corbiau, 1914.* 就中その P.18-21 参照)

四

一般の信ずるところでは、後繼者はその創始者の組織者としての能力を欠くが故に其後を持續し難い。然も Godin 死して三十年、フアミリストアイルは大戦に因つて蒙つた兵燹と掠略のルインの上に再興して現存するのである。こは正

しく創始者の能力以外の特徴がこの組織に存するのではあるまいか。(Gide, *Des institutions*, p. 71)。

乍然また若しこの事業に勞資協調の秘訣が存するならば、幾多模倣者の相踵ぐ可きことは明かであるのに、實はこの事なくて終つて居る。再現し難き實驗とは何んであるか。物好き之れである。人あり、若し偉大なれども不胎なるフアミリストアイルの事業を、今や普く世界にその胄をのこしたるかの Rochdale の Pioniers のそれと比較するなれば、兩者の間の差異を了解することが出来やう。(Ibid.)

最早多くを語るを要せぬ。たゞかの歐洲大戦後頃にその主張を強めたる勞働階級の産業管理に關聯して、或種の教訓を求むるものは、先づは「勞働者王國」の完全なる一標本と稱すべきフアミリストアイルに之を得るであらう歟。然もサ

ンデカリズムが要求するところのそれは、此れの錯雜にして教派的構成とは全然別箇のものである。(一三)

(一三) *Des institutions*, p. 71, p. 72, Note 1. 參看。

ラスキンの勞働者教育

——一八六〇年一委員會に於ける

彼の陳述——

奥井復太郎

一八五三年 ヴェニス石「完結後ラスキンの生活は社會の實際的方面に携る新方面を加へて來た。一八五三年のエヂンバラ講演は講演者としてのラスキン最初の經驗であつた。此種の行爲はラスキンの云ふ所に従へば、彼の教義を普及せしむる直接的方法に外ならない。紙上に連

ねた數千萬語も其の效果に於ては數分の面接的談話に及ばない。他方より見ればラスキンの熾烈なる所信が彼をして實際的行動慾を感せしめた事も想像しうる。此の「建築と繪畫に關する講演」は別にラスキンの思想上に新地を拓いてゐるものでない。「近世畫家論」或ひは「ラファエル前派論」並びに「ヴェニス石」等の要旨の反覆に過ぎない。一八五四年以降の實際的仕事としては此の講演を最初のものとして、その最も盛に行はれた一八五七年があり他の方面にはタアナの遺作整理に關する努力がある、又重要な興味を有するものとしてはオクスフォード博物館の建設と建築博物館並びに労働者學校との交渉があつた。最初のもものはアクランド博士の希望より出で、オクスフォード大學に自然科学研究の充分なる施設を行はんとするものであり、その建築に際してはゴシック建築復活の機運を

如實に示さんとし、その意匠裝飾に於いてはラスキン本來の主張である職匠の自由創意の表現を尊重した。アクランドと親交あるラスキンが此の計畫に參じて多大の献身的努力を爲したのは當然の事で前後二回に亘つて發表された「オクスフォード博物館」なる小冊子はアクランドの手になる熱心なる計畫援助並びに説明書にしてラスキンの書翰數通は共にのせられてゐる。建築博物館の計畫は建築藝術の復活に基けるもので、主として建築研究者にその資料を蒐集利用せしむるにあつた、ラスキンの援助は材料の提供に大なると共に又研究生に對する講演獎勵等も行はれた。最後に労働者學校との交渉は本稿に述べんとする所と關係が深い、以下聊か詳述するであらう。兎に角一八六〇年「近世畫家論」第五卷完結までにラスキンの仕事は多岐繁忙であつた、一八五六年に同書第三、第四の兩

卷が公にせられてゐる、外には一八五四年に書かれた「水晶宮の開場」(古代建築保護論)一八五五年より五九年に亘つて毎年執筆された「現代美術評論」(アカデミー・ノート)タアナの英國港灣圖によせた序文並びに解説(一八五六年)一般に描畫法を教示した「エレメンツ・オブ・ドロイニング」(一八五六年)同「エレメンツ・オブ・パースペクティヴ」(一八五九年)等がある、又彼の講演は常に著述に等しき用意と努力とを投せるものであつた、一八五六年以降に數多き講演は従つて單なる講演の類でなく整理を加ふると共に一個の堂々たる著述となつた、即「美術の經濟學」「二つの路」等の講演集は之れである、是等の講演にはラスキンの經濟學原理の片鱗が顯示せられ且つそが既に妄語として非難せられし點を、且つ社會改造論者としての彼の經過を示す點に於いては最も興味あるものであ

る。此外タアナ遺作に關する諸種の寄稿等があるが目下はそれに言及するの必要を見ない。此處では労働者に多大の興味を有し、彼等の幸福を目的としたラスキンの立場からして前述の労働者及學校との關係を見、其の後ラスキンがかゝる労働者改善の計畫に對して如何なる態度をこるに到つたかを語らうと思ふ。本稿の副題に示した陳述は一八五九年末六〇年初めにかけてその完成をつけた「近世畫家論」と「アン・ツ・ジョス・ラスト」の執筆せられたる地ンヤモニーへ赴きし旅行(六〇年五月)との間に挾まる六〇年三月二十日の事なるを想像せば自から其間の興味を窺ひうるであらう。

二

一八五〇年フレデリック・デニスン・モオリス等は協働主義の原理による Society for promoting Working Men's Associations を組織した。

基督教を社會化し社會主義者を基督教に教化せしめんとしたモオリスが基督教社會主義の名を受けつゝ「ゼ・クリスチャン・ソシアリスト」の第一冊を發刊したのも此年の十一月であつた。モオリスの此組織は成功を齎す事少く一八五一年解散して新しくロンドンに「労働者學校」Working Men's Collegeを起し、彼等の精神は之れによつて永く協働主義的改造運動の中心となつた。ラスキンの關係したのは此の労働者學校に於ける労働者職技の實際的教育の方面であつた。

當時の労働者階級に於ける教育設備は皆無或ひは不完全であつた。従つて他の階級と異なる所なき教育を労働者に授けるの目的を持つた同學校の企圖は、労働運動の發達労働者の階級的意識の現状より觀察しては癡愚であり、中産階級の良心の發現に過ぎなかつたかも知れない。

が、其後此方面に於ける社會的公共的施設の發達よりみれば正に先覺的行動であつたと云はねばならぬ。その目的は自から闘争的階級意識の教育とは異なる。教育は生活支持の方便たるに生命の資であり、従つて労働者の榮達をはかつて労働者階級よりの脱離を目的とするものではない。その階級、労働者そのものとしての立場に於いて彼等の知的靈的精神的必要を満足せしめ彼等の改良を計る事を表榜した。此の最後の點は労働とその擔當者を尊重するラスキンにとつて最も貴重なる主張である、此の思想を最濃厚に包含せる「ヴェニス」の石」第二卷第六章「ゴシックの性質」は同學校計畫者の一人ファーニヅァル氏によりて一種の創設宣言書として利用せられた。ラスキンは進んで同校の美術の科目を引き受けた、此等は同學校の出發に多大の利益を與へたとされてゐる。

ラスキンの正規的關係は一八五八年五月に及び其後斷續的に講演等を行つたに過ぎない。彼の講義並び講演は素晴らしい興味に充ちてゐた様である、然かも時に應じて叫ばるゝ彼の社會論は殊にすぐれたものであつた。労働者は先づ彼自からを悟り、而してその上に思想を形成する事なくしては、議會場裡の彼等の主張も鼠の啼聲以上のものではないと喝破せるは、彼が更に労働者自身の議會を要求する主張と共に、労働組合の進展せざる時代の發言としては正さに豫言的のものであると稱されてゐる。

併し茲に云ふ労働者は一般労働者と同意語であるか否やは疑問である、少くともラスキンの指導下にあつた労働者は寧ろ職人と稱すべきであり、工藝美術家たるべきものであつた。今日一般に解する特殊の統 的技能を有せざる、或は全然技能を必要とせざる労働者の意味ではな

い。「ウォーキング・マン」「レイボアラ」と云ふ言語を用ふる事に於いてラスキンは如何なる労働、如何なる労働の擔當者を意味したか、明瞭に説明する事なしと雖も明かに彼は無技能、非創造的、不熟練労働者を意味してゐたのである。蓋し彼は労働の意義に二つの相異つた觀念を持たない、生活維持の労働中に生活のよろこびがなければならぬ。いかなる場合にも労働者の正當なる状態は彼に製作者としての仕事と地位を與ふる事にある、之れラスキンの中世紀労働組織を稱讚する所以であり又大量生産、大規模工場經營に附隨する今日の労働組織を悉く否定して小規模産業を推稱する所以である。今日この兩者の懸絶著しきが故にラスキンの稱する「労働者」なる言葉は今日の一般労働者の觀念を與へず特殊の職匠にのみ適應するもの、様に解せらるゝのである。

ラスキンが労働者學校に於いて生徒に對する態度、又その計畫に參じた理由は、明かに此の労働の製作化の主張である、「建築の七燈」(「ヴェニス」の石)に於いて明かに又は言外に含まる、所の工匠精神の絶叫に基くに外ならない。近代の一般労働者は勿論、特殊の工匠に於いても製作愛の精神は缺乏してゐる、故に仕事を愛して幸福を見出すを得ない、仕事を愛する感情を有せるものは彼の動作に於いて多少の成功を約束せられてゐる。故に今日の状態ではかゝる感情を有する少數の人々は皆社會的認識の低き職匠の地位を捨て、自からアカデミシヤンの仲間に入らんとする。故に美術家は不當に尊大にして職匠は不當に卑下してゐる。前者に肉體の労働より生ずる快樂がなければ後者には創造のよろこびがない。共に労働の快樂を感じ得ざる状態である。故に先づ此の思想より打破されねばなら

ぬ、その爲めには職匠として彼等の思想に精練を加へ以つてその思想を彼等の手によりて直接に表現せしむる事を企てしむると共に社會一般は、製作の優劣の外に精神の表現としての作品を感じなければならぬ。かくして美術家と工匠の融合をさくは「ヴェニス」の石の一目的であつた、工匠をして傲慢なる美術家たらんと渴仰せしむるは彼自からの地位の尊貴に對する不遜なる態度であり労働の精神を知らざるの不幸である。ラスキンは現在労働者階級の不幸を茲にみるが故に美術家ならしめざる現在の地位に於いて工匠に製作の精神を生かしめ美的思想を働かしめんとするのである。彼をして美術家たらめずと云ふは、かゝる工匠の外に美術家なる尊大にして實際的労働を忌避する特殊なるものある限りは工匠精神は救はれずと云ふ事を意味してゐるのである。一八五七年四月六日國民美

術館敷地委員會上の陳述はこの點を寸句の内に明かにしてゐる。

「余の努力は大工をして美術家たらしめんとするには非ずして大工としてより幸福ならしめんとするものである」(第一一四問)と、又それは後出「八六〇年委員會上に於いても現はされた思想であつた(第九問又「ラファエル前派論」(第一節参照))

故に労働の神聖は彼に於いて最も深い意義がある。各種の能力、技能の相違より来る職業別は完全なる理想社會に於いてすら存在するものである。その社會に於いて仕事の高低はあつても、その爲めに諸種の労働の精神に尊卑を附す可き理由は存在しない。人以上の仕事と與へよと云ふ「七燈」中の絶叫は、労働を以つて労働者、製作者としての人格を高上せしむ可き尊貴を保たしめんとする労働神聖論に外ならない、

其は又「ヴェニス」の石に唱へられたる人間靈魂の自由なる活躍を許す境地である。ラスキンの藝術論に於いては自由なる活躍を許された魂は常にその眼前により、高尚尊貴なる題材を認めうるのである、従つて常に仕事は、製作者の謙讓を要求する所のものである。かゝる意途を有したラスキン、同學校の效果について餘り満足するを得なかつた、寧ろ彼はその努力を空費と考へるに至つた。その回想はモオリスのそれと共に自叙傳にかゝげられてゐる、ラスキンはあらゆる邪道の根本として「近代的精神」の不信、非宗教的をを指摘する、モオリスは無邪氣、眞面目なる不信者である、之の者によつて指導せらるる、労働者學校が多大の功績をあげ得ないのは當然であることみた。しかし此の事はラスキンの宗教的熱情による偏見と見る事をうるとしても彼の思想上では重

要な意義を持つてゐる、即ち彼は一美術論を以つて人心を救ひ得ずと見た事である。換言すれば労働者救済は彼等に向つて説くのみにては遂に成功する所ないと感じた。併し彼の美術論は絶対的存在の闡明を目的とするものであつた、従つてこの絶対的存在、不變の眞在はあらゆる方面について説かるゝ必要あるは當然である。其は神であつても理性であつてもその形體はとに角として、宇宙の統一的一大原理を闡明するはラスキンの責務であり、この關係に於いて彼の美術論は彼にとつて意義を有するものなるが其はあまり効果を見なかつた。彼はそれを宗教的に訴ふる事が出来た、併かしこの期間(一八五八年以後)はラスキンの宗教的動搖時代である、茲に彼が今や世人にとつて最も重大であり緊切な關係に立つ經濟現象についてこの絶対性を試みる時機に到達したのである。人はラスキンが

經濟的環境を無視して美術興隆を行ひ得ないとみて經濟論へ入つたと云ふ。其れも事實である、しかし、ラスキンは美術も經濟もいづれをも貫ぬく根本原理の存在を信じたのである、此の眞理の前に經濟も美術も共に同格な位地にある。唯此の眞理を闡明する有効な方法は經濟主義の社會に於いては經濟問題に進入するよりにかざるのである、茲に筆者はフレデリック・ハリソンの所言の如くラスキンを以つて、かの多才博識にも拘らず美術家たり得ず、批評家たり得ず、歴史家、哲學者、神學者又は經濟學者たり得ざりし缺陷を見出すと共に、又是等のもの、供給し能はざる或ものを殘した事を認めるものである。

三

英國に於ける一八六〇年代は社會運動上比較的平靜な時代と觀察せられてゐる。有産階級的

自由主義の旺盛な時代であり労働階級は階級的反感を意識する所少く共に協調の徳を謳歌するに賛してゐた。其處には微温的な社會改良政策があつた。前述の如く労働者救済を目的とする公共機關は今日よりすれば或は之れを行ふもの、目的よりして労働者にとつて有害である一部分より貶しめらるゝかも知れない。しかし當時としては、前代の労働者階級の絶叫に迫られて支配階級もかゝる施設を行ふの必要と利益を認め又労働者階級もそれを認めてゐたであらう。又事實、知力の自然的發展上等の微温的施設が將來の労働者意識の覺醒に役立たなかつたとは云ひ難ひであらう。

然かるに無産者文化を主張する者以外に、微温的改良策を非實際的として否定するのはラスキンであつた。目的の壯大なるに對して、彼は手段實行の糊塗的なのを奮慨するものであ

る、彼の目的は社會鬭争にない、然かし理想の社會を生み出すには、徳性への跳躍に基づくは云へ革命的社會主義が要求する以上の根本的改變を必要とする。ラスキンはこの根本的改變を呼んで實際的だと云ふ。蓋しそは問題の根本にふれてゐるようであり、是等問題は此の以外に解決せられないからである、然かるに彼が破壊的革命主義者と最も縁遠い所のものとなつたのは時代の然らしむる所であらうし、又個性に深く根ざした性質の相違に基づくであらう。此點はバアナアド・ショウの「ラスキンズ・ポリティックス」を想起せざるを得ない。「一般にラスキナイトは吾人の現在の社會状態に對する反對者の最も敢然たるものである」ラスキンは屢、彼の理解せられざるを歎じ又人はラスキンを難解としたが若し理解せられたとせば恐らく彼は絞首臺上の人であつたであらうと。

一八六〇年三月に開催せられたパブック・インステイションズ・コンミッティーは一般租税によつて支持せらる可き諸種の制度を設けて民衆の健全なる娯樂と改良とを奨励する便宜を計る可き議會の權能並びにその方法について調査する事を命ぜられたのである。ジョン・ラスキンは労働者學校との關係及び繪畫その他美術研究に於ける權威としてその所信を徴されたのは同二十日の會議で此日の出席者は座長 Sir John Trelawny, Sclater Booth, Du Pre, Kinnaird, Hanbury, Sir Robert Peec Slaney, John Tollenache 等であつた。

質問は先づ座長の發言にはじまる

『貴君は此首府に於ける主要なる博物館繪畫美術館並びに組織等について一般的知識を持たれると思ふが如何』
『よく知つております』

その答の大意を掲げる。

『時間の問題は密接に他のより重大なる問題即ち如何にして諸氏は是等施設の利用をなしうる様労働者に用意せしめらるか云ふ問題にかゝる。吾人がその教養に關して、先づ労働者に之れを納むるをうべからしめざるならば、その如何なる機會を與ふ可きやと云ふ事は一國として吾人の前にある問題とはならない。是は凡べて終業時間短縮、更に重要且つ困難なる、労働時間の規律並びに如何にして労働時間内に於ける作業を労働者に對して競争的壓迫的ならしめざるやの問題と結ぶものである』(第八問)

ラスキンはかれの教導の効果を問はるゝに對しては既述の如く彼の目的が労働者階級よりの脱出を試みさるるものに非ずして彼等が炭坑夫鍛鐵夫として現在あるまゝにあらしめ、而して如何にして彼等をより幸福、賢明ならしめんと

『殊に繪畫について?』——『然り』
『又労働者學校に多大の關係を有されし様に思ふが如何?』——『然り、多くの關係を有します。五年間許り教師として關係しておりました』。

『貴君は労働者階級に多大の好意的教養を與へおらるゝ様思ふが如何?』——『特にドロウイングの講義に出席するクラスに比して一般労働者階級の爲めにそれ程多くの事はいたさぬ、勿論前者は労働者階級と關係する所のものであり又小生も此のクラスにより労働者階級について幾分知る事を得ました』。

質問は之れより各種施設の労働者に利用せらるべき便宜なる時間の問題に入りラスキンは労働者がかゝる機會を利用す可き時間は夜より外に無き事論ずる餘地なしと答へてゐる。今左に

するやにある旨を答へた。

『貴君は一階級より脱し向上する希望は殆ど貴君が彼等に與へんと欲せる自己改善の状態より不可分なりと解する様にとつてよきや』
——『否、小生の考ふる所は人が彼自からの階級より脱し登らんと望む瞬間に於いて、彼は彼の仕事をその階級内に於いて立派にやらないのである。彼は自己の地位を脱却すべからずして、その地位の内に向する事を望むべきなり』(第一〇問)

更に當時英國に於いて美術的製作に従事する者が知力的にその仕事に適せざる事を承認し『小生は唯斷定を下すのみにして證據をあげ得ない、併し自信を以つて斷定する事は、余がその精神を觀察したる労働者は今日に於いて如何なる美術に於いても意匠不能にして僅かに——如何なる時代、如何なる國によつて

も凌駕され難き摸倣と繊細なる手先の仕事のみ可能だと云ふ事である。然しながら全然機械的な手先の仕事は常にその人自身にとりて利益なきと共にその製作を所有する人によつても結局は利益がないものである(第一五問) 又サウス・ケンシントン博物館の夜間開場の利益について答へたる所感は極めて有力なものである、即ち

『小生の印象を以つてすれば今日労働者は一日中に如何に多くの仕事を爲しうるか、出来る丈け多くの仕事を爲さんと云ふ事に強制せられてゐるが故に一般に是等の施設にあつても機械その他その職に關係するものに氣をとられる、従つてそは何等休養とならないのである、家族を伴ふ事が許されても人の心より仕事の壓迫感の除かれざるが最大の弊害であり、見聞せる事物の適切なる説明によつて得らるべき休養によ

り充分休み得るのである、…彼は落付きななく歩きまはつて遂に満足する事なく疲れ家に戻るか酒屋へ飛込むに到るのである』(第二〇問) さればラスキンの主張する結論は、かゝる施設は労働に飽滿して無氣力になれる労働者を救ふを先づ目的とせよと云ふのである、普通の體質を有せる人にとつて英國の一日の労働時間は彼を壓迫し毀滅せしむるものである、故にその後には於いて再び心を働かしむるは休養とはならない、即ち出来る丈け樂みを興へうる計畫に於いて知識の増進をはからねばならない。(第二一問) 更にラスキンは労働者が博物學に興味を有する事を陳述し之れを説明すべき平易の科學を要求してゐる。(第二二、二三、三四問) 而して是等の施設はよろしく國家の義務として行はるべく、個人の自意的慈善的計畫に委ねべきものに非ずと云ふ點は彼の思想の歸向を示すもの

として注意に値するであらう(第四五、九八問) しかるにラスキンの忌憚なき言辭は委員中に反感を惹き起したらしく、殊に彼の産業論、上流階級の對労働階級の態度に於ける英佛の相違論等はサア・ロバート・ピールとの舌戰を惹きしむるに至つてその極點に達した。以下聊かこの點を綴らう。

四

Kimaird 氏の、數年來に於ける英國労働者の地位に改良の實なきやの間に對しラスキンは 『生存競争日々に激烈となり、又労働者を擁護すべきより、大なる努力の爲さるゝにも拘らず、吾國商業の立つ原則は、毎日彼等を壓迫し日増しに深みへと沈淪せしむる事を思へば吾英國に於いてかゝる改善の眼前に存する證左なし』と答へた(第一〇四問) かくて又ロバート・ピールの間に答へて労働の組織が規律せられ、

労働者の身心が競争制度によつて碎毀せらるゝ、現状を不可能ならしめん事を望んでゐる。(第五三問又第一二四、一二五、一二七問) ピールは再び労働者の階級脱逸につきラスキンの所信を正したる後 『確かに對外的競争は此國の労働階級にとつて一大利益であるが如何』と問ひラスキンは之れを『否』と答へた。 『外國人の踵後を追ふ事速かなる此國の人々の間に、競争がその美術的知識の擴張を致すに莫大の利益ある事が陳べられてゐるが如何』 『諸外國の製作する所のものゝ知識をうる事は吾國労働者にとつて非常に有益であるが外國との競争の精神は何人にも利益ないのである』(第六〇、六一問) 即ち進んでその理由を説いて、國際的地方的産業分化並びに職能的分業の利益を主張するの

である(第六二問)

然かしピールをして最も昂奮せしめたのは英國上流階級の對労働者態度が佛國の如く自由ならず又向上的施設に於いて大陸の遙かに成功せる事を論じたラスキンの陳述である。

此問題は第二四問より發する。

『貴君は此の關係に於ける民衆の改良に、此國に於いて爲さるゝより以上の遙かに多大なる興味の存せらるゝ事實を多くの外國に於いて認めたりと云ふが如何』——『遙かに多大なり』

而して次に彼が解説する所は製作の優秀なるは生活環境に依繋するの關係にして『製造業に於ける諸外國の優秀なる一大原因は、彼等がその周圍に絶へずより美しき事物を有せる事にありを信ず、吾國の製造工業都市の街道に於いて教育せられたる人々にとつて、眼又は感覺にそ

と(第六七問)

正さしくラスキンはピールの奮激を感じたものゝ如くである。ピールは更に追及する、ラスキンが其の所説に有力なる證左をあげ得ざるを見て佛蘭西人に美術的趣味知識の豊富なりと云へ労働者に對する同情に於いては遙かに英吉利に劣れるの事實あるを指摘する。ラスキンは之れに對して一般集會其他悅樂の機會に於いて、労働者を幸福にし、彼等の幸福を充分味はしむるを許すより、大なる社會的性向の存在を主張し(第七〇問)ピールの追及に於いて遂に左の如く極言する。

『否、あらゆる祝祭日又到る時に於いて、貴氏は労働者が妻を携へ庭園又は都市郊外に於いてより幸福氣なるを、全般に於いて一層幸福なる状態にあるを見うけられし事と思ふ。彼等の能ふ限り、彼をいためて今儲に

の精練を求めんとする事は常に不可能である、彼は爲し得ないのである。その家庭に於いても少なからず彼の感覺を鈍くするものに耐ふるに慣れるのである』と。(第二五問)

かゝる見解は大英國の自尊を傷つくる所大である、殊に國威を双肩に負ふ所信ある政治家にとつて特に然りである。ピールは、ラスキンの忌憚なき所言に深く傷つけられたのであらう、以てラスキンを追究する所頗る苛酷である。

『貴君は英國内に於けるよりも諸外國に於いて労働者階級の知的發達について懐かるゝ興味により遙かに多しと思ふ由を述べたが如何』——『小生はその質問に寧ろ輕卒な答へをした。自分は外國の社會について殆ど何物も知る所ない、たゞその時は目下佛蘭西に於いて爲されつゝある大努力を公開せられたる諸施設の一般的愉快とを考へてゐたのである』

せんとする望も、機械の如く壓迫し之れを使用せんとする慾も英國に於けるよりも少ないのである。併し小生は此點にこだはらぬ事を注意せられたい、此は問題に關係あるものと覚えぬ、蓋し外國又は我國に於いて如何なる興味が存在し様とも、そがいつれに於いていかにあらねばならぬかと云ふ事は全問題ではないと思ふ』(第七一問)

併しピールの側に於いては問題はしかく簡單でなかつた。即ち彼は彼奮激の眞意を吐くのである。

『併し貴君は外國に於いては英國に於けるよりもより、大なる同情が労働者階級に對して保たると云ふ事を暗示して此國上流階級の性質に汚辱を投ずるものではないか、今、余は事實に於いてこそが正反對なる事を斷言するのである』

ラスキンは之れに對してかく答へた。

『小生は此國の上流階級と労働者階級の間の關係について余の有せるあらゆる感情を吐露せしを非常に遺憾に思ふ、而して其は現在論じ可き問題に非ず且つ余はそれ以上の審問を拒絶する所のものである』と。(第七二問)

ピールは更に「同一職業に従事せる英國と外國労働者を比較して前者か後者より幸福ならず」どのラスキンの言を捉へ瑞西チューリッヒ製造工業の現状について訊さんとしたがラスキンは是等について無知なる旨をのべ且つ佛蘭西の場合に言及せるものとし又労働者階級とは一般労働者を指すものにして、工場労働者のみに限るべきでないを強辯した。此のラスキンの論理的薄弱に於いてピールはラスキンの上流階級に對する所言を齷さしめんと欲した、ラスキンは之れ爲す事なくして終つた。

『余の答辯は特に行樂の時に於いて觀察せる労働者の様子を語つたのである。彼等は上流階級と相交つて、彼等自からより幸福なるを見、ルーブル又は歐洲大都市の公園を散歩する彼等を見ては、英國に於けるよりも遙かに、毫も自己を恥づる所なく、社會のあらゆる上流階級と相結んでより幸福なるを見る。然かるに英國の労働者は聊か常に見すほらしき衣服をし、か、ス諸機關、並びに教會に於いても常に他より避けんとする。外國に於ける氣質は上下兩階級間により峻嚴なる別離とより貴族的感情の存する傍ら、しかも正しく此等の状態を理由として發せる、労働者は労働者として自己を示し、友愛を以つて取扱はるゝの事實を示せる如くである。余は單に労働者と云はない、全下層階級の人々が主人又は使用主によつて愛情、親交、同情を以つて遇せらるゝのであり、かゝる關係は

『然からは貴君は、外國に於ける上流階級は英國に於ける彼等よりも労働者階級の狀態により多くの興味を有せりとの、意に用ひたる所言を撤すべきや』——『小生はそれを撤する事を爲さぬ、余は唯そが余の印象であつた旨を述べたに止まるのである』

『貴君はそれを確證するを能はざるか』——『能はず』

『故に其は單なる個人的印象の問題に過ぎざるか』——

『全く然り』。(第七七—八〇問)

恐らくピールは理論に克てる者の感ずる説服力の喜びと、しかも内心に於ける空虚をなほも感じたであらう。されば座長は此の問題を重要視してラスキンに再びその斷乎たる見解を問ふ所あつた、論戰は再び開かるゝのである。ラスキンの答辯は次の如くである。

隔絶せる階級關係中余にとつて最も感動的のものであつた。かゝる印象あるが故に問題の重大なるを思慮せずに早急の答辯をしたのである。而して小生は現在何程迄此印象を是認するをう可く考へうるやを陳ぶる用意を持たないのである』(第一〇三問)

上流階級の、優越者的寛容と自由とを誇る者がラスキンの此種の釋明で満足したとは考へられない故に「個人的印象」に過ぎない此の問題を再びピールは取扱ふとするのである。

労働服にてロンドンのナショナル・ギャレリーに現はれし故に、英國にて特に労働者が上流階級の侮蔑を招ける事を實見せりや否やとのピールの間に對しラスキンは労働者が確かにかゝる侮蔑の存するを悟り居れるを實見せりと答へ、水晶宮の如きあらゆる階級の者に混じて労働者も來る可き場所に於いて労働者が美術の鑑賞を

妨げらるゝやどの質問に對しては、「労働者は屢々行かんと欲する所へ能く赴くあたはざるのである」と、他國にありてはかゝる意識的掣肘の存する事なければ到る處に彼等は悠々たりうるのである。即ラスキンは再び『斯くの如きが事實である』と余は信ずる旨を陳ぶるに止まる』と言をきつた。(一一〇八、一一二問)之に對し或問者は英國に於ける戶外行樂の希望は労働者をしてかゝる機關に集まらしむるより、戶外に彼等を轉せしむるに非ずやと反問した、ラスキンは誠にメリー・イングランドの名こそ慕しけれ、其は製造工業の繁榮と共に永遠に失はれた形容詞であるとした。(一一二二、一一四問)ラスキンの所言を聽へざる以上の如くである。ピールは三度ラスキンに迫つた。しかも問題はより重要さを失つた所に聊カロバート・ピールの焦燥を窺ひうるものゝ如くである。

此の質問と陳述との讀者が既に注意しうる如く、ラスキンは労働者に對する友愛の存在が彼等の生活の一面に於ける幸福感を増加せしめた事、又佛蘭西なぞの労働者が安息に於いて何んもなく晴々しい朗かさを持つてゐると主張するのである。此の後の點は三度ピールとの論戰に於いてラスキンを奇妙な窮地へ追ひ込んだのである。即ちピールは佛蘭西労働者の服装の整へる事に對するラスキンの主張に對し、英國に於いては、労働者と貴族とを服装に於いて區別し得ざるの理由に於いて之れを否定せんとするに、ラスキンは労働者の服装のよりよく整へるは、日曜平日を問はずその服装に於いて彼と貴族とを充分に識別しうるからであるとして佛蘭西労働者の青色ブラウズを稱讚した。

『ブラウズを着せるの故に外國労働者はより整ひたる服装をせりと爲すや』——『彼等はそ

の仕事に適せる服装をせる爲めである』
 『貴君は彼等が日曜祝日にそのブラウズをぬぐを以つて不變の習慣とせる事、そは又仕事の終了後にブラウズを脱ぐ事を知れりや』——
 ラスキンは顧みて他を云ふ。その云ふ所は彼の衣裳論にして、衣服の心身に及ぼす作用並びにその反作用を説くのである、故に此の議論はその論理的缺陷に於いてラスキンを敗つたのである。

『しかも彼等のより整へる服装とは、仕事終了後脱ぎ去るブラウズよりなる』云ふか——
 『小生は貴氏の此の事柄に關するより、良き知識に服するものである』(第一一六—一二二問)

ピールは此の論理的缺陷に於いてラスキンを衝きいささか自からを慰め得たかも知れない、しかも吾人はラスキンが依然佛蘭西労働者の英

國労働者より、何んもなく服装の整ひ且つ自由悠然たるの印象を捨て得ない事と、又これを事實と確信せるの態度を窺ひうるのである。

かくて此の陳述は最後にラスキンの労働者に對する一般的態度を如何にすべきやを説明するを以て終つてゐる。

『最後にその地位の如何なるにせよ彼労働者の爲めに、爲されざる可からざる道を確かむるの方法は、何人も、彼は吾人自らの實子なりと、且つそは兩親並びに何等救護無くして残されたる者なりと、想ひ、又彼が在るが儘の状態より脱するの機會は永久に空しき事と、斯くの如き状態に残されたる己等の實子の爲めに各々爲さるべきを欲するが如くに労働者の爲めに爲すに努むべき事等を想ふ事である』と。(第一二九問)

五

以上は一八六〇年四月二十日バブリック・イン
ステイチューションズの委員會上のラスキンの陳
述中で殊にシア・ロバート・ピールとの論争點を
特に示したのである。本稿の目的は既に記せる
如くラスキンが如何に表面的労働者改善策に不
信を表せるに到れるかを示すと共に又是等問題
に對する當時の支配階級の態度を一面なりとも
窺はんとすんにある。委員會はラスキンを招け
る事によつてその目的に添ふ所少なかつたであ
らう、蓋しいづれにその責任があるにせよこの
エヴィデンスの大半は所期の目的を外れた質問
であり答辯であつた様に思はれる。唯表面的政
策に不満を懐けるラスキンが愈々社會の根本を
動かすべき喚聲をはなたんとするに到れる數ヶ
月以前の此の陳述は、中に社會改造論者として
の彼の眞面目を窺はしむると共に一朝にして十
數年に互つて築き上げし彼の名聲を墮さめしか

の小著「アン・ツォ・ジス・ラスト」が如何に當時
の世論に容れられざりしかを委員會上の委員の
所言に徴して豫見せしめるのである。ラスキン
の經濟論は自由主義全盛の時代誠に極端なる妄
語であつた。が此の委員會上のラスキンはその
妄語に於いて「アン・ツォ・ジス・ラスト」の著者
として充分にその姿を現はしてゐるのである。

(一三・六・三稿)

雜 報

理財學會々報 五月二十八日午後一時半より大
ホールに於て、理財學會春季大會を催す。講演
左の如し。

經濟活動の拘束性の解除と

經濟社會の擴大

英國歴史派經濟學

經濟心の倫理

社會科學の人生價值

聽講者七百餘五時半閉會す。

萬來舎に於て晚餐會を開き、長谷川氏及び高
橋教授出席、歡談數刻八時半に及びて散會す。

出席幹事 三年、夏目、永田。二年、檜原、
濱谷、鈴木、和田、後藤。一年、寺本、武井
野村。